

比較と越境 ——バルザック 『人間喜劇』の「序文」における 「人間性と動物性の比較」について

和田 光 昌

1. なぜ動物か

19世紀は群集を発見した時代だという。革命や人民投票などで「計算することのできない力」を発揮する群集という存在に、人々が驚いた時代と言ってもいいだろう。いわゆる下層民としばしば同一視された群集は、個性を持たず、制度あるいは秩序から外れた存在、何をするかわからない不気味な存在とみなされた。群集をどのように理解し、表象するかはすぐれて近代的な問題といえる。

群集への新たなまなざし、あるいは表象の対象としての群集の誕生は、七月王政下マス・カルチャーとして新聞が成立したときにおそらくその起源を求められることができる。ルイ・フィリップは「フランス王」ではなく、「フランス人の王」と称した。しかし、フランス人とはいったいどのようなものたちののだろうか？ 名士と比べて圧倒的多数を構成するはずの「群衆」を理解することなくして、それを知ることはできないだろう。

群集は、「群集に沐浴ゆあみするというのは、誰にでもできることではない。群集を楽しむことは一つの芸術である¹」と書いたボードレールにとって、自己の詩学に密接に関わる問題だったし、また、世紀末から20世紀初めには、ル・ボンヤタルドラによって社会心理学の対象とされたこともよく知られている。

「動物」も、この群集という個性を抹消された人間の群れを分類し、理解するための参照枠として用いられた。動物と「比較」することで人間を理解しよう

¹ Baudelaire, *Le Spleen de Paris*, XII « Les foules ».

とした。それはフィリポンの『カリカチュール』誌の風刺画のことを思い起こせばよくわかる。

バルザックが、『人間喜劇』の「序文」(1842)でラファーターやガルの名を挙げているのも、ひとつには、かれらが、そのような比較の旗手だからである。人間と動物の類似にもとづいて、外見（とくに顔）から内面（心）を知ろうとするラファーターの観相学はもちろん、バルザックによればラファーターの「継承者²」とされるガルの骨相学も、その「医学的」根拠——大脳が人の知性や感情の唯一の座であるという発見——は、動物と人の神経系を比較した「比較解剖学」からもたらされたものだった。ラファーターの『観相学断片』が刊行されたのは1775-78年であり、ガルが弟子のシュプルツハイムと共同で『神経系一般、とりわけ脳の解剖学と生理学』全4巻を刊行したのは、1810-19年である。バルザックの「序文」において、ガル、ラファーターと並んで言及されている動物磁気、彼が「1820年以来その奇跡に親しんできた」という、このメスマルの学説もまた、同時期³のものであった。18世紀末から19世紀初めにかけて、類似にせよ、対比によるにせよ、人と動物の「比較」が新たな知として、フランスに次々と流入していたのである。

しかし、バルザックの文学創造に動物性がはたした役割を考えると、決定的な重要性を持つと思われるのは、「序文」における次の一文である。

[[『人間喜劇』の最初の] このアイデアは、人間性と動物性の比較から生まれた。

Cette idée [première de *La Comédie humaine*] vint d'une comparaison entre l'Humanité et l'Animalité⁴.

「人間性と動物性の比較」とは、何を意味するのだろうか？ この一文の直後

² Balzac, *Avant-propos, La Comédie humaine*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», tome 1, 1976 [AP], p.17.

³ 1875年に提唱され、メスマルがウィーンを追放され、1878年以降パリに定住したこともあり、革命前後のフランスに大きな思想的影響を与えた。

⁴ AP, p.7.

に、有名なジョフロワ・サン＝ティレールとキュヴィエの間の論争が言及されている。1830年2月から4月、王立科学アカデミーにおいて、軟体動物と脊椎動物の類似を示そうとした発表にたいして、〈構成の単一性〉の立場から賛成したジョフロワ・サン＝ティレールと、種の不変説の立場から反対したキュヴィエが対立し、後者が勝利したとされる論争である。

ジョフロワ・サン＝ティレールが唱えた、いわゆる「構成の単一性」は、バルザックによれば、新発見ではなく、「ここ200年間、〈構成の単一性〉は、すでに最高の精神の持ち主たちの関心事だった⁵」という。スウェーデンボリやサン＝マルタンなどの神秘主義者、ライプニッツ、そしてビュフォン、シャルル・ボネ、ニーダムなどの博物学者たちも、「別の言い方」で〈構成の単一性〉を唱えたとされ、結果的に、かなり強引とも思われるやり方で結び付けられることになる。その果てにあるのは、「唯一の動物しか存在しない」という単一説的命題である。

唯一の動物しか存在しない。創造主は、すべての有機体にたいして、ただひとつの、同じ型紙しか用いなかった。動物とは、ひとつの原理なのであり、この原理が、動物が成長すべき環境の中で、外形——あるいは、より正確な言い方をすれば、そのかたちのさまざまな差異——を持つのである。動物学における種は、これらの差異から生じる。

Il n'y a qu'un animal. Le créateur ne s'est servi que d'un seul et même patron pour tous les êtres organisés. L'animal est un principe qui prend sa forme extérieure, ou, pour parler plus exactement, les différences de sa forme, dans les milieux où il est appelé à se développer. Les Espèces Zoologiques résultent de ces différences⁶.

「唯一の動物」が、「原理」としてとらえられていることに注目しよう。引用文につづく文では、この「原理」を発見したことこそジョフロワ・サン＝ティ

⁵ *Idem.*

⁶ *AP*, p.8.

レールの「永遠の名誉」に他ならないとバルザックは断言し、また、それがゆえに、彼こそ「高等科学という点における真の勝者」であるとされる。あえて科学史の通念をねじまげ、しかもそれを「高等科学」というあやしげな名のもとに勝者を逆転させるバルザックの筆遣いはきわめて興味深いが、とりあえず、ジョフロワ・サン＝ティレールとキュヴィエの論争については後にみることにして、「人間性と動物性の比較」からどのようにして『人間喜劇』の発想が導かれていくのか、作家の論理の道筋をたどってみよう。

論争を引き起こしたこの理論にずっと前から傾倒していたわたしは、この観点からすれば、社会は自然に類似していることを見た。社会は、人から、その作用が展開される環境に応じて、動物学において多様な種があるのと同じ数だけの異なった人間たちを作り出しているのではないだろうか？

兵士や、労働者、経営者、弁護士、閑人、学者、有力政治家、商人、船乗り、詩人、貧者、僧侶などの間にある差異は、把握がより困難とはいえ、狼や、ライオン、ロバ、カラス、サメ、アザラシ、雌羊などが分けられている差異と同じくらいはなほだしいものである。したがって、動物学に種があるように、社会種というものが存在したのだし、いつの時代にも存在することだろう。ビュフォンが、動物学全体を、一冊の本のなかにあらわそうとして、素晴らしい著作をなしたのなら、社会にたいしても同種の作品をつくりだすべきだったのではないか？

Pénétré de ce système bien avant les débats auxquels il a donné lieu, je vis que, sous ce rapport, la Société ressemblait à la Nature. La Société ne fait-elle pas de l'homme, suivant les milieux où son action se déploie, autant d'hommes différents qu'il y a de variétés en zoologie? Les différences entre un soldat, un ouvrier, un administrateur, un avocat, un oisif, un savant, un homme d'État, un commerçant, un marin, un poète, un pauvre, un prêtre, sont, quoique plus difficile à saisir, aussi considérables que celles qui distinguent le loup, le lion, l'âne, le corbeau, le requin ; le veau marin, la brebis, etc. Il a donc existé, il existera donc de tout temps des Espèces Sociales comme il y a des Espèces

Zoologiques. Si Buffon a fait un magnifique ouvrage en essayant de représenter dans un livre l'ensemble de la zoologie, n'y avait-il pas une œuvre de ce genre à faire pour la Société?⁷

こうして、バルザックは、社会のビュフォン、博物学者たらんとし、「ある一つの時代の二、三千の人物を描くこと」が使命となる。この数は、一つの時代を構成する「類型の総体」の数でもあり、また、最終的に『人間喜劇』に含まれることになる登場人物の総数でもあるという。これだけ多数になると、複数の「枠、あるいは「ギャラリー」⁸」が必要となり、「私生活情景」、「地方生活情景」、「パリ生活情景」、「政治生活情景」、「軍隊生活情景」、「田園生活情景」などの区分がなされる。動物学でいう、門から順に、綱、目、科、属、種へといった、系統樹的なものではないものの、一つ一つが、作家によれば、「人間生活の一時期」をあらわしているのだという。「私生活情景」が、幼年期、青年期、「地方生活情景」が、情熱や利害、野心の時代、「パリ生活情景」が、様々な趣味や悪徳、極度なものの一大絵巻といった具合に。

もちろん、バルザックは、自然と社会の違いに無自覚なわけではない。ある種について、そのオスを記述すれば、メスについての記述は「数行」で済ますことのできる博物学者と違い、人間社会では、「商人の妻が時折、王妃に値する女であった」り、「王妃が、芸術家の妻に劣る⁹」こともあるのだから、小説家の仕事は少なくとも博物学者の二倍になるという。また、そもそも、不変の原理としてカトリシズムと君主制を奉じていると公言するこの作家が、動物性の原理を人間社会に応用するだけで『人間喜劇』を書くことができると単純に信じていたとはとても思えない。それでも、「人間性と動物性の比較」から導き出された「社会種」という考え方が『人間喜劇』の基本的枠組みを支えている以上、この「種」という概念をめぐる、どのような動物学的知が、何と対立しながら発動されているのかを知るのには、バルザックの文学創造における動物性の比喩の射程を知るためには重要である。ジョフロワ・サン＝ティレルと

⁷ *Idem.*

⁸ *AP*, p.18.

⁹ *AP*, p.9.

キュヴィエ論争をバルザックがどのように理解したのかを再確認する必要がある。

2 小説は「社会種」を記述する

ジョフロワ・サン＝ティレールとキュヴィエの論争は、しばしば、「進化論者」の前者が、「生物不変論者 fixiste」の後者に敗北した生物学上の挿話として語られる。

もしそうなら、なぜ、バルザックは、科学史の定説を覆してまで前者が後者にたいする真の勝者であると主張したのだろうか。それは彼自身の表明する政治的信条と矛盾しているのではないか。そのような疑問が生じる。もちろん、作家が作品について述べることがらが作品そのものと一致しないという事態は、なんら目新しいことはない。メタディスクールを裏切り続けることこそ小説のエクリチュールの本質なのだと言ええる。しかし、この場合は、「序文」内部での対立であり、同じメタディスクール・レベルでの対立なのである。問題はより深刻な様相を帯びている。

実際、プレイヤード版の「序文」の校訂者マドレーヌ・ファルジョーが付した該当箇所注を読むと、彼女がこの問題を解決しようと腐心している姿がうかがえる。

先に引用した、「動物学における種は、これらの差異から生じる」という一文について、ファルジョーは注で次のように述べている。

構成の一致に関して、ジョフロワ・サン＝ティレールとバルザックの理論が完全に一致しているように思われる一節の中で、この短文に注意を払う必要がある。いっけん単純に見えるが、種という厄介な問題を提起するものである。この問題についてバルザックが意見を共にするのは、実際は、キュヴィエの生物不変論の立場であって、ジョフロワ・サン＝ティレールの進化論的立場ではない。

Dans ce paragraphe où l'accord semble total entre les théories de Geoffroy Saint-Hilaire et celles de Balzac, relativement à l'unité de composition, il faut prendre garde à cette petite phrase, apparemment

simple, et qui soulève l'épineux problème des espèces, sur lequel, en réalité, Balzac partage le point de vue fixiste de Cuvier et non le point de vue évolutionniste de Geoffroy Saint-Hilaire¹⁰.

ここでは、ジョフロワ・サン＝ティレールは「進化論的立場」であると明確に述べられている。そして、『シャルル・ルディエへの手紙』、『セラフィタ』、『ベアトリクス』などから、「種の不変性」を主張する箇所を引用しつつ、彼女は続ける。

バルザックが忠実にその思想に従っているといえるのは、ビュフォン、ニーダム、そしてとりわけキュヴィエであり、ジョフロワ・サン＝ティレールではない。彼のシステムと、「すべてが理にかなっている、まったき」地球という彼のビジョンは、ジョフロワ・サン＝ティレールの進化論的観点とは相容れないものである。

[...] c'est Buffon, Needham et surtout Cuvier que suit Balzac, et non Geoffroy Saint-Hilaire ; son système et sa vision d'un globe « plein et où tout se tient » sont en effet incompatible avec le point de vue évolutionniste de ce dernier¹¹.

他の注でも、「すでに見たように、キュヴィエにたいするバルザックの賛嘆は、けっして変わることがなかった」と述べ、1830年の論争については「かなり漠然とした情報」しか持っていなかったと推測されている。いずれにせよ、ジョフロワ・サン＝ティレールの影響が「決定的」であったのは、バルザック自身の単一説に合致する限りにすぎず、汎神論や進化論との関係では、小説家は動物学者と袂を分かつとしている。それにたいし、キュヴィエの影響の方が「より持続的で、おそらくより重要¹²」だという¹³。

¹⁰ AP, p.1116.

¹¹ *Idem.*

¹² AP, pp.1117-1118.

¹³ もっとも彼女も後の論文 «Balzac homme de science(s)» (*Balzac : l'invention du*

しかし、ジョフロワ・サン＝ティレールは本当に「進化論者」なのだろうか。フランスソワーズ・ガヤールは、「科学：モデルあるいは真理」の中で、ジョフロワ・サン＝ティレールの「可変性の法則」には、方向性がないと指摘している。

したがって、すでに見たように、構成の一致という概念から直接的に導き出される可変性の概念は、ある種のネオ・ラマルキズムとしての変異説ではないし、ましてや、前ダーウィニズムとしての進化論ではない。可変性の概念は、どこへ向かうのか、変異の方向について何も予測するものがない。

Ainsi l'idée de la variabilité, corollaire comme nous l'avons souligné de celle de l'unité de composition, n'est pas un transformisme, une sorte de néo-lamarckisme, encore moins un évolutionnisme, une sorte de pré-darwinisme ; elle ne préjuge en rien de l'orientation ni du sens des mutations¹⁴.

方向性を欠いた「可変性」は、「進化」ではなく、変異論でさえないと言う¹⁵。そうであるなら、キュヴィエとジョフロワ・サン＝ティレールの対立のもつ社

roman, Belfond, 1982所収) では、二人のうちにどちらかに軍配をあげるのではなく、ジョフロワ・サン＝ティレールからは「体系」、キュヴィエからは「方法」を学んで、バルザック的単一論が成立したと述べている。「したがって、キュヴィエ「か」ジョフロワ・サン＝ティレールではなく、キュヴィエ「と」ジョフロワ・サン＝ティレールなのである。」(同書、p.54)

¹⁴ Françoise Gaillard, «La Science : modèle ou vérité. Réflexions sur l'avant-propos à *La comédie humaine*», dans *Balzac : l'invention du roman*, Belfond, 1982, pp.75-76.

¹⁵ さらに彼女は、キュヴィエの突然変異を革命と考えると、まさにバルザックが恐れているものだとし、生物学の政治的読解にまで踏み込んでいる。ジョフロワ・サン＝ティレールにおいて、変更されるのは、種であり、(起源の一者 «*unité originelle*»としての)動物性ではない。それをバルザックに置き換えると、変わるのは「社会種」であり、「社会的なもの *le social*」は変わらないとする。つまり、ジョフロワへの依拠は、ドクトリネールとしてのバルザック——「小説家バルザック」とは区別すべきだが——にとって、歴史を排除し、社会そのものを統一体としてとらえ、変異の原因を考察することを避けるのに役立つしていると主張する。キュヴィエの不変論が政治のレベルで体现するものが、ファルジョーとは逆になっているのが興味深い。

会的政治的意味が、バルザックの信条と矛盾するのではないかという懸念はそもそも成り立たなくなる。

他方、キュヴィエについても、彼の「種の不変性」の概念が、進化論成立のための条件だったとする科学史家の指摘もある。

キュヴィエは、[ラマルクとは] 逆に、動物界に、根本的に異なる動物体制プランに従ってできた不連続な集団を区別した。それらの間をつなぐ環は存在しない。キュヴィエは、このように、それまで全ての進化理論が依拠してきた、生物の切れ目のない連続、自然の階梯という概念を拒否した。この発見は、1820年から30年代の変異論に深刻な打撃を与えたが、種分岐という概念——自然を一続きの連続体とみなしているかぎり発想不可能な概念——を可能にしたのであり、後にダーウィンが理論化することになるのだった。

Cuvier, au contraire, distinguait dans le monde animal des masses discontinues, obéissant à des plans d'organisation radicalement différents, entre lesquels il n'existait pas de maillon intermédiaire. Cuvier refusait ainsi la notion de série continue des êtres vivants, d'échelle des êtres, sur laquelle s'étaient appuyées jusqu'alors toutes les théories de l'évolution. Cette découverte portait un coup sévère au transformisme des années 1820-1830, mais rendait possible la notion de divergence des espèces --- notion inconcevable tant que l'on considérait la nature comme une série de formes continues --- que Darwin allait plus tard théoriser¹⁶.

以上のように、キュヴィエとジョフロワ・サン＝ティレールのどちらがより進化論に親和的かは一概には言えない。したがって、ジョフロワ・サン＝ティレールが真の勝者だとバルザックが「序文」で宣言したとしても、それは、必ずしも彼が(社会)進化論的意見の持ち主であることを意味するわけではない¹⁷。

¹⁶ Daniel Becquemont, «Du transformisme au darwinisme», Isabelle Poutrin (sous la direction de), *Le XIX^e siècle. Science, politique et tradition*, Berger-Levrault, 1995, p.10.

むしろ、ジョフロワ・サン＝ティレールの勝利は、「単一説 doctrine unitaire」の勝利である。ゲーテの賛嘆もそこにあった。そう考えてこそ、神秘主義¹⁸や、彼らを媒介にして知った動物磁気にたいする小説家の傾倒が、系統的に理解されるのではないか。

3 エツェルとの間に

われわれがより注目したいのは、したがって、社会種という概念が、生物学史あるいは、進化論の文化史のなかでどのように位置づけられるかということより、それが「人間性と動物性の比較」から生まれたというときの「比較」の意味であり、単一説との関係である。比較は、そもそも単一説に反する行為ではないのか。自然－博物学者の組み合わせから社会－小説家という図式を構想し、自然と社会、動物と人とをパラレルな関係に置くことは、むしろ二元論的思考なのではないか。

この疑問について考えるきっかけとなったのは、「序文」草稿のなかの、あるヴァリエントの存在である。フランス国立図書館所蔵になる「エツェル文書」のなかに、エツェルの手になる、「序文」の一部のエスキースが保存されている¹⁹が、それは、ちょうどわれわれが引用した、「人間性と動物性の比較」から小説家の仕事を着想した部分にあたる。すでに引用した箇所なので、フランス語のみ、筆者がマイクロフィルムで確認した草稿の転写を以下に示す²⁰。

¹⁷ また、彼の政治思想と矛盾しているわけでもないことになる。もちろん、「序文」というメタディスクールのレベルのバルザックを、作品を書くバルザックと同一視してよいかという問題はいづれにしても残る。

¹⁸ もっとも、バルザックは、「物質的な思考」に興味をもっていた。精神が物質化する瞬間、精神的なものが物質という、自らと逆のものに変わる瞬間——誤解を恐れずに言えば、理想的な、到達不可能なものが知覚可能なものに墮落する瞬間——に興味を持っていたのであり、完全に閉じた世界としての神秘思想とは別物である。

¹⁹ N.a.fr. 16933.

²⁰ ディプロマティックなものではないが、同箇所は、次の中にも収録されている。A. Parménie et C. Bonnier de la Chapelle, *Histoire d'un éditeur et de ses auteurs*. P.-J. Hetzel (Stahl), Éditions Albin Michel, 1953, p.33.

folio 2

Dans la nature il n'y a qu'un animal
un seul et même patron pour tous les êtres
organisés -- l'animal est une forme d'être
qui prend sa forme extérieure ou pour
parler plus exactement les différences
de sa forme (en coloration, étendue, etc.)
de ce milieu où il est appelé à vivre
et à se développer. [je n'] ici je
ne discute pas, j'affirme et cette
sublime proposition si bien en harmonie
avec les idées que nous nous faisons
de la puissance divine sera l'éternel
honneur de Geoffroy st Hilaire le vainqueur
de Cuvier sur ce point de la Haute Science
or buffon a fait un magnifique ouvrage
en représentant dans un livre l'ensemble
dans la Zoologie.

Dans la société il n'y a qu'un
Homme, mais la société fait
de l'homme suivant les milieux [dans] où
il se produit autant d'hommes différents
qu'il peut y avoir de variétés en zoologie.

folio 3

Les différences entre un soldat, un industriel
un administrateur, un avocat, un oisif un savant
un homme d'état, un marin, un poète, un
pauvre, un prêtre, sont quoique plus difficiles
à saisir aussi considérables que celle qui distingue

le loup le lion l'âne le corbeau le requin le
 veau marin, le brebis etc. - Il existe
 Il existera donc de [tout temps] des espèces
 Sociales comme il y a des espèces Zoologiques.

細かい異同を別とすれば、現在われわれがプレイヤード版で読むことができるテキストとほぼ同様だが、重要な相違が一点ある。それは、folio 2の第二段落の冒頭に、「Dans la société il n'y a qu'un Homme」という一文があることである。これは、決定稿にはみられない。「Pénétré de ce système bien avant les débats auxquels il a donné lieu, je vis que, sous ce rapport, la Société ressemblait à la Nature.」とあるのみである。その次の、「la société fait de l'homme [...]」以下の文は、決定稿の「La Société ne fait-elle pas de l'homme, [...]」以下の文とほぼ同一と考えて差し支えない。エツツェル草稿と決定稿との最大の違いは、「社会には単一の人間しか存在しない」という一文があるかないかである。

「Dans la société il n'y a qu'un Homme.」「社会には単一の人間しか存在しない」という一文は、言うまでもなく、その直前の段落の冒頭の一文「Dans la nature il n'y a qu'un animal.」「自然には、唯一の動物しか存在しない」と対を成している。すなわち、自然と社会、動物と人間が、完全にパラレルな関係、いわば二元論的關係にあることが対句として明確に表現されている。根源的一者としての動物と人間が同じ資格で想定されている。しかし、「社会には単一の人間しか存在しない」を削除すると対句は成立しなくなり、両者のパラレルな関係、二元論的關係はそれだけあいまいになってしまう。

この違いは、対句の有無といったたんなるレトリックの問題ではなく、人間と動物の関係をめぐってバルザック的単一説がどのように展開されうるかにかかわる詩学上の問題でもある。

このことをよりよく理解するために、エツツェルが編集し、バルザックも重要な寄稿者の一人であった、グランヴィルの挿絵入りの作品集『動物たちの私的公的情景』*Scènes de la vie privée et publique des Animaux*の「序文」と比べてみることにしよう。「序文」はエツツェル（スタール）によるもので、そこで

彼は、動物たちを「わたしたちの時代の欠陥を批判する」ために用い、「人間が動物といっしょにされた、この二重の批判」によって、批判の「辛辣さ」や「苦味」は軽減され、「より一般的」で、「より不愉快でない」ものになると述べている。

さらに、エツツェルは、動物を登場させ、言葉を操らせてきたそれまでの作品と、この作品集がどのように違うかについて、次のように述べている。

動物たちにことばをしゃべらせるのは、私たちの創意工夫だと言いたいわけではないが、私たちより前に、動物たちについて書いた、あるいは人間について書くために動物について書いた人たちが歩んだのとは、ある一点において異なった道を選択したと信じている。

実際のところ、今日まで、寓話や教訓話、喜劇において、人間はつねに歴史家であり、「語り手」であった。つねに自分自身に教訓を与える役割を担い、借り物の動物の姿の下で、完全に自らを消し去ったわけでは少しもなかった。人間は常に主役であり、動物は脇役、代役のようなものだった。動物の世話をするのは、つまるところ人間だった。本書においては、人間の心配をし、自らを裁きながら人間を裁いているのは動物である。おわかりのように、視点が変更されているのだ。要するに、わたしたちがこれまでの書物と異なっているのは、人間は自ら進んでは決して言葉を発せず、逆に、動物から言葉をかけられるという点である。動物が、ここでは、裁き手、歴史家、年代記作家になっているのであり、こういってよければ、主役になったのである。

Nous ne nous donnons certes pas pour avoir inventé de faire parler les Bêtes, mais nous croyons pourtant nous être écarté en un point de la route dans laquelle avaient marché ceux qui, avant nous, ont écrit sur les Bêtes ou à propos des Bêtes en vue de l'Homme.

Jusqu'à présent, en effet, dans la fable, dans l'apologue, dans la comédie, l'Homme avait été toujours l'historien et le *raconteur*. Il s'était toujours chargé de se faire à lui-même la leçon, et ne s'était point effacé complètement sous l'Animal dont il empruntait le personnage. Il était

toujours le principal, et la Bête l'accessoire et comme la doublure ; c'était l'Homme, enfin, qui s'occupait de l'Animal ; ici c'est l'Animal qui s'inquiète de l'Homme, qui le juge en se jugeant lui-même. Le point de vue, comme on voit, est changé. Nous avons différé enfin en ceci, que l'Homme ne prend jamais la parole de lui-même, qu'il la reçoit au contraire de l'Animal, devenu à son tour le juge, l'historien, le chroniqueur, et, si l'on veut, le chef d'emploi²¹.

これまでの動物寓話では、性格の一面を誇張し類型化した人間をあらわす手法として——すなわち、純粋な、極端化された性格類型として——動物が用いられていた。そして「語り手」が、最後に「教訓」を述べることも多かった。たしかに、エツツェルの指摘するように、この「語り手」は、それまで静かに動物劇を見ていた（演じさせていた）人間の語り手であることは間違いない。それにたいし、『動物たちの私的公的情景』では、動物たちが語り、人間に話しかけ、結論づけるのも動物たちだという。

たしかに、作品集にバルザックが寄稿した一編、まさにジョフロワ・サン＝ティレールとキュヴィエの論争が下敷きになっている『ロバ版・偉くなりたい動物用手引 *Guide-Âne à l'usage des animaux qui veulent parvenir aux honneurs*』では、事態はそのように進行する。

教授職を得るため、「比較本能学」をでっち上げてパリにやってきた元小学校教師の物語である。彼は、飼っているロバの「わたし」に、特殊な化学薬品を塗ってシマウマに仕立て上げ、さらにキリンのように側対歩で歩かせることで、動物の本能が環境によって変化することを証明し、キュヴィエ風の分類法をひっくり返すそうとする。この企ては見事なまでに成功し、ジョフロワ・サン＝ティレールを思わせる「老哲学者²²」の弟子によって報告書が作成され、大きな話題となる。その結果、キュヴィエと目されるアカデミー会員セルソー男爵

²¹ *Scènes de la vie privée et publique des animaux*, MM. Marescq et Companie, éditeurs, Gustave Havard, libraire, 1852, p.2.

²² グランヴィルの挿絵では、マルミュスが動物（鸚鵡？）の姿で描かれているのにたいし、この「老哲学者」は人間の姿をしている。

と大臣の訪問を受け、望みどおり、政府の援助と勲章、教授職などを与えられるのだが、実際には、比較本能学の講義は、セルソーの弟子によって行われることになる。こうして、「シマウマの真相は、桁外れの例外として扱われてもみ消さ²³」れてしまう。元小学校教師は、セルソー側に寝返って「大哲学者」の単一説派を裏切ったのである。

一方、ロバはイギリスに引き取られ、あたかも人間の裏切りに同調するかのように、(元)主人たちの言いつけに背き、側対歩を止めてしまう。

とうとう、わたしは以前歩いていたように歩き始めた。歩き方を変えたことでわたしはさらに有名になった。名高きマルミュスと断固として呼ばれていたわが主人と「多様説」派は一党こぞってこの事実を彼らの有利になるように説明することができたのだ。事態がこのようになることを今は亡きセルソー男爵は予言していたと言ったのである。私の歩行は、神によって動物たちに与えられた不変の本能への回帰なのであり、私と私の種族はアフリカでそこから逸脱していたというわけだった。

Enfin je me mis résolument à marcher comme je marchais auparavant. Ce changement de démarche me rendit encore plus célèbre. Mon maître, obstinément appelé l'illustre Marmus, et tout le parti *Variétaire*, sut expliquer le fait à son avantage, en disant que feu le baron Cerceau avait prédit que la chose arriverait ainsi. Mon allure était un retour à l'instinct inaltérable donné par Dieu aux Animaux, et dont j'avais dévié, moi et les miens, en Afrique²⁴.

あたかも、セルソーの分類体系をくつがえすはずの「比較本能学」を、セルソーの言うことを「鸚鵡返しに繰り返すだけの人」に講義を任せて普及させた

²³ Balzac, *Guide-Âne à l'usage des animaux qui veulent parvenir aux honneurs*, dans *Peines de cœur d'une chatte anglaise et autres scènes de la vie privée et publique des animaux*, introduction, notices, bibliographie, chronologie par Rose Fortassier, GF Flammarion, 1985, p.80.

²⁴ *Ibid.*, p.83.

主人マルミュスに倣ったかのように、ロバはキリンの真似を止めてしまう。このことは、本能が新しい環境によって変化した事例としても解釈可能であるはずなのに、実際は逆に、さらにセルソー派が勢いを増す口実を与えることになるのである。何もしないこと、強いものに奉仕することこそ、出世する最上の道だとロバは結論づけ、最後に、動物たちに「事物のあり方を変えず」、革命を避け、「われわれの恭順と、実現された事柄を常に感謝することによって、わたしたちが人間の費用で養ってもらえるような植物園（動物園）を様々な国にたくさん作ってもらえるようにしようではないか」と呼びかける。そうすれば、「真のマルミュスの閑職を享受するものとして、憂いなしの日々を小屋ですごすことができる」のだと訴えかける。そして、剥製にされて博物館に飾られるという、パンテオンに遺骸を取められるのにも匹敵する死後の栄光を夢見ながら物語は閉じられる。人間と動物の平行な関係は明らかである。

4. 越境

しかしながら、『人間喜劇』では、『ロバ版・偉くなりたい動物用手引』にみられるようなかたちで人間と動物が比較されることはない。たしかに、「序文」では、自然と社会、博物学者と小説家が平行な関係に置かれてはいるが、それは小説内部での話ではない。動物が語り手となって人間社会を判断することはない。

エツェルの草稿と決定稿を比較すると、「社会には単一の人間しか存在しない」の削除以外にも一つ、動物と人間の関係について考えるうえで重要と思われる変更が確認できる。決定稿の以下の箇所にかかわるものである。

果てしない生命の流れによって、動物性が人間性のなかに越境してくることをいまだ認めない学者たちが幾人かいるとしても、貴族院議員となる食料品の店主も確実にいるのであり、社会の最下層まで転落する貴族も稀ではない。

Si quelques savants n'admettent pas encore que l'Animalité se transborde dans l'Humanité par un immense courant de vie, l'épicier devient certainement pair de France, et le noble descend parfois au

dernier rang social²⁵.

「果てしない生命の流れによって、動物性が人間性のなかに越境してくる」とはどのような意味なのだろうか。この一文を「明確でない」とするファルジョーは、バルザックが不明瞭さに気づき、1846年10月25日の『ラ・プレス』誌では、「下級種の上界への社会的輸血が目下実施されていることをわれわれは見るのであり」という説明を、「貴族院議員となる食料品屋も」の前に付け加えたと指摘している²⁶。輸血は、17世紀までは動物の血が用いられていたことを考慮すると、「動物性が人間性のなかに越境してくる」というとき、動物性に対応するのが下級種であり、人間性に対応するのが上界に属するものたちであることが推測される。となると、同じ人間界のなかに、動物性を多く持ったものと持たないものとがいることになり、ここでの動物性は、「人間性と動物性の比較」から社会種が導き出されたとき見たような、人間の世界とパラレルな関係に置かれた動物という意味ではもはや用いられていないことがわかる。

当該箇所を、エツツェル草稿で確認すると、「動物性が人間性のなかに越境してくる」という表現は見られない。

folio 3

[...] S'il ne sera pas encore
prouvé que le poisson devient volatile ou que le
volatile devient poisson, il est prouvé que
l'épicier peut devenir pair de France et que
le noble, descend parfois, et quelquefois
non sans raison au dernier rang social.

該当する箇所にあるのは、引用の一行目から三行目、「魚が鳥となり、あるいは鳥が魚となることの証明はまだなされていないが」という表現である。魚と

²⁵ AP, p.9.

²⁶ AP, p.1119.

鳥が、双方向的に変異可能であるとするのは、いかにもジョフロワ・サン＝ティレール的である。それはともかく、草稿のこの文では、動物界の変異と人間社会の変動が同列に置かれていることに注目しよう。魚が鳥になるように、食品品屋が貴族院議員になるのであり、貴族が社会階層の最底辺に没落するのは、鳥が魚になるのと同じである、というのである。動物性が「境界＝岸を越えて (se transborde)」人間性の中に流れ込んでくるとする決定稿の表現と全く別物なのは明らかである。エツェル草稿にみられる動物界と人間社会の平行的な関係は、決定稿ではもはや成り立っていない。これは、エツェルの草稿にあった「社会には単一の人間しか存在しない」が決定稿で削除されたのと同じ方向性を持った差異である。二つの書きかえは、共に、二元論を脱し、単一説に向かう方向性を示しているといえる。

このことは、「人間性と動物性の比較」の変容を物語っているように思われる。バルザックが「人間性と動物性の比較」から『人間喜劇』を発想したと言うとき、その「比較」の意味は、動物界と人間社会を平行的な関係に置くことであったはずである。しかし、ここで問題になっているのは、ある人がどの程度動物性を内に含み持っているかという、人間界内部での「比較」である。動物と人間という二極は一元化され、動物性は人間の中に越境して流入し、人間性を特徴付けるものとなる。「序文」のなかで、小説家と博物学者を平行的な関係に置きながらも、小説家の仕事は博物学者のそれとは異なるという主張がしばしばなされるのも、二元論的立論の底に単一説を志向する伏流が顔をのぞかせているのだと考えれば、なんら不思議ではない。

それでは、越境し、人間性に流入する動物性はどのようにあらわされるのだろうか。まず考えられるのは、人物描写における動物への言及であろう。そのなかで最も頻繁にみられるのが、比喩として動物が言及される場合である。

レオン＝フランソワ・ホフマンは、『ゴリオ爺さん』の各登場人物別に、動物の比喩の出現回数を分析している。それによると、ゴリオ爺さん20回、ヴォートラン15回、ヴォケェ夫人与ミシヨノー嬢は共に9回、ポワレ氏8回と、ヴォケェ館の住民は比較的多いのにはたいし、デルフィーヌ7回、アナスタジー4回、ニュシゲヌ2回などと、上流社交界に属するものたちは少ない。ラスティニャックは両者の中間の6回である。そして、上流社交界のボーセアン夫人、

ランジェ夫人、マキシム・ド・トラユ、レストー夫人などについては、動物の比喩はみられないという。

動物の比喩は、他の比喩より視覚イメージを強く喚起し、その動物の持つ性質をまずその人物に与えてしまうという。ポワレが「社会という大製粉所で働くロバ」にたとえられるとき、われわれは、まずその動物のイメージを思い浮かべ、それからそれが象徴するもの——重労働に耐える力、頑固さ、愚かさ、従属的な公務員の戯画など——のことを考えるのだという。つまり、動物の比喩は、たとえ身体的特徴の類似だけから用いられたとしても、それ以外の本性にかかわる部分にまで影響が及んでしまう。これも「越境」の一種といえようか。ともあれ、ホフマンによれば、このような動物の比喩の対象としばしばなりながらも、自分が動物であることを知ることによってそれを超越している人物こそ、他ならぬヴォートランである。スフィンクスにしばしばとえられ、胸は「熊の背中のように毛深く」、「鋼鉄の鉤爪」、「野生の猫のように輝く眼」を持つ彼は、獣の「うなり」をあげる。「猛獣のようなエネルギー」を持ち、仕草は「ライオンの」ようである。これらすべての動物性の比喩にもかかわらず、ヴォートランは、動物性のなかに埋没するわけではない。それが、「動物のように、うめくような不分明な叫び声」をあげて動物性の中に埋没して死んでいくグリオとの違いであるとホフマンは主張する。

すでに見たように、ヴォートランは、人であると同時に猛獣である。彼の中で、本能と知性は解きほぐせないほど混じりあっている。動物性を彼は受け入れ、その意識を持つことで、彼は偉大になる。しかし同性愛者としての愛が、彼の主義を裏切らせてしまうのだ。野獣たらんとするものの、自分の中にある人間を殺すことまではできない。このような、人間と獣との内面的葛藤により、彼は悲劇的次元を持つことになる。

Vautrin, nous l'avons vu, est homme et fauve à la fois. En lui, instinct et intelligence sont inextricablement mêlés. Conscient d'une animalité qu'il accepte, il atteint à la grandeur ; mais son amour d'inverti lui fait trahir ses principes. Fauve il se veut, mais il ne réussit pas à tuer l'homme en lui ; ce conflit intérieur entre l'humanité et la bestialité lui donne une

dimension tragique²⁷.

自らの中にある動物性を意識し、受け入れる人間。これは、「動物性が人間性のなかに越境してくる」という「序文」の表現を思い起こさせないだろうか。ヴォートランが、ホフマンも引用しているクルティウスが言うように、「『人間喜劇』中、もっとも強力な人物」だとするなら、動物性を含み持った人間のなかに、バルザックは、ある種の理想をみていたのではないか。ヴォートランが類稀なる動物磁気の操り手であることもおそらく無関係ではない。動物性の人間への越境は、動物界と人間社会の二元論から出発しながら、「単一の動物」と「単一の人間」というパラレルな関係が曖昧化されたのと同じように、二元論が単一説に回収される契機とみなすことのできる改稿だが、それにとどまらず、人物造詣の源泉ともなっている。バルザックにおいて動物性は、小説家の仕事の範囲を定める境界画定的で連辞的なものから、突出した人物を描き出すための範列的なものへとその機能を移行させているといえる。『人間喜劇』では、『ロバ版・偉くなりたい動物用手引』のように動物が語り出すことはないが、内部に動物を抱え持ったものが躍動する世界が展開されるのである。

²⁷ Léon-François Hoffmann, « Les métaphores animales dans *Le père Goriot* », *L'Année balzacienne*, 1963, p.103.